



提醒紀談

5
79
5



1節
78
5

相摸屋



本儀

提醒紀談卷五

簡要の語
竹笠丸論
伊吹艾
学問と勸
猫の性鼠小あぐん
蝙蝠
藤呂里
世田谷丸舊跡
阿蘇山
僧絶海の杖

華美と禁ず
煙草の制禁
灸治
龍異
熱水の魚
烏紀
龜松孝行
霧島山の逆矛
杜熊山凌子をうす
朝鮮墨

五ノ月



禍辱も及ぶぞう 駿臺 雑話

華美と禁す

○むろゝある諸侯の赤老何業といひしその万石以上の才ありてあ
りては其れ國あり登城の耐詰の木綿羽織と着るが踏次まで
兩小あつてぬまひあつて子立園北扉子つけて乳々あてそのま
君おしを鷹野ううふこれと云くあるぬを日下せお色うう
りのろく入れれとせよといふも又同じく親藩此赤あく
相所より一者金十両あて着る人の禮と威せしが書中子是
わりの金を出して禮威す人もあり難くも一武具ハ捨別の物
あれハやくも結構な志つるあり子孫我一の意やよく知く忘る
べうべう一筆書てその禮も副る赤子遠くも又同じ

以諸侯の中子世小賢者と稱するありしその赤老の子
年ころあると府繪の平籠子大きある珊瑚珠と緒ありあり
腰子さげしそのま君えんから他日子その人と前よま
て汝を平籠と好むと云く此平籠ハ某あつたりあり是
とさげよとて君ぬり此平籠子木薬子を緒ありありて賜り
たりそれより必の貴族も必まで華麗と禁せしとありこれ
らもよか六七年の事そりいつの禮子う風俗く諸葉
子ハありぬや馬具武具ハ軍装子ゆるこれあまどいふん
それも華麗と禁すその教書と奉り守るハ何の用とすしこ
とみやあつんやあらぬことあり古き人の語ハ大坂夏陣子
將軍赤陣中と御巡見の耐本多佐渡守を諸帷子と着る

何の用子立かめの子やと申しはれハ周防中さきうハあの
筆を羨しく上をえたるをいふと云ふ笑をれハ何れ子親も親子
も子ありしと云助成ハ諺ハとあり古老 雑話

煙草の禁制

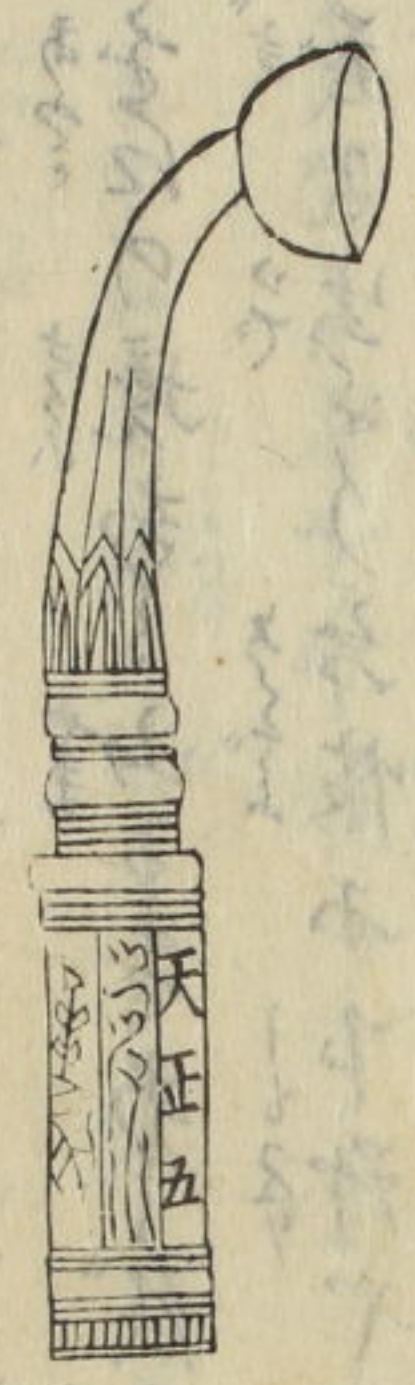
○台徳院攝津代子煙草振り申すまは諸國へ仲付られ向
以城内小於てたど飲ゆ事以法交子仲付られ申す御番
湯飲所へおのゝ奇言煙草との居れところへ土井大炊頭や
兼く此以事申す何れも仰天し申すふたど道具と云せし
大炊頭一をえて以番荒子向ハ只今何れものまれれと我木申
少るぬとれ申す申すいれを迷惑しと云は接殺もささる
赤面子おまびらう再之申すも有せいあく袖う煙草入き

せるとさし出せり大炊頭二之が飲ま存トよらず先づ
らきまめのと下され色分ありと云申す之れハ又三條
今日の美ハおのゝも申すも同前申す申す申す申す
無用小舟上あり殊の外神懸いあそをされ申す申す

古老 雑話

按ずる子煙草以停止申す元和元年六月二十八日天下一統
小舟出さるる事世事談録子見申す事ハと云申す
慶長十四年七月十四日發府より京都へ使者と云はし
あまハ公家元不形儀の事ある子あつと云あり煙草法交
の事いよゝ禁すべしと創業記小あり申す元和元年
より七年前をやく己子この禁ありしと知るくくても

世人好むと云ふに檢ねば其の如く追々禁令ありしと
 又云ふに其の煙草とのふとのハワレ此の異國より後
 里来りてかく移るると云ふ大和事始り慶長十年長
 崎様の馬場へ植ゑると原産くすおとくふ小二本ハ五那不
 煙草と植ゑるの始とすづ一孔よりわき世に移るれたる
 どもそハ異國舶来の物を用ひざるあるべし安富隨筆小
 車海峯子會津年譜と引て文祿四年苜蓿始用鳥と云
 也又落穂集追加倭漢三才圖會ハ天正年中世子弘光あり
 一より二ハ實あるべし豊臣大岡の好むと云ふ水口張
 の煙管あり好事の者募造し世に傳ふ天正五と彫付
 けり



煙管の彫物ハ水口權多ハ天正五
 又吸口ハ水口吉久とあり



元和二年十月三日の仰出されし
 條々

一たむし作もの町人を五十日百姓六十日自分多糧なる
 一同事ハ此同前の事
 一同作りの在ぬを為る料百姓千人亦存て各目百文づ可
 出奉

多ううとて尋ねらるる事よ尋ねたりて存け(ハ)只今中
でんと申分あつて死と覚悟のこと二三もこれありし
中(ハ)も随見やけしその覚悟をあらうけその子細ハ今死
せんとて死せしと死あらずとも苦しくぬ美と存じ
け死せしと苦しくぬ美と今まで二三死と覚
悟の事もけし向学同少くも死あざきと覚悟あされけ
是と今中さんあおお尋ねやもありとて此随見が一言
と珠の外奮傷の学問こそとて子中より随見も
たごこれあつてハ苦しくぬ大事を成就しけしハ二三の覚
悟はなほ成ざる美と存けされどもこれハ畢竟の覚悟あつて
あつてハ父母兄弟もこれまきもれしけし一概子んけして

又及程子遠ひ中けこれ後ハおの覚悟の前事やすに
及むらあり(話)

龍異

○升形の里とて地一人の龍と美とて一龍とのありその家
此母小龍とて多へて多く此龍と時へ多くあり多ふれあ
まがこれと殺し調理して美とて一日何んまくくの善小臨
こく龍とてちあが居るがいつかあをん足と踏まけして水中
小まろび落る子救多の龍あつたりて叩殺しけしあ伏見
の河に色子住居し龍と美とてそのありそのあ河子のそめり
とあく庖丁と水中子ら落しけしけし附子三人龍子向く云
汝水中子落しけし庖丁と取りけしあ故ちやんとけし

訂のまをうと遠るをうりあはハ一孔が為子庫の壁も藩の如く
産くうりさてうち母れくる訂のあぐらハ翼子環の如く肉を生
トたり彼ちエこれと足て嘆息くく云く煽煽と苦ゆると
ま乃我罪ありこの煽煽の歲月と経ると巴子久きうち何と
食相らうく流るをとぼるまやとおつんとつけて又るま
その棲るところのト小糞ありいと石の議のまをく人をさきあ
たり此者この事と安く観ふまをこの羣集せりその中子何
お人の云その煽煽ハ蝶々雄々をわくわくと此偶の一つが餌と
をひて扶け養ふと終るべくはとさうまはハ人々を夫婦
の情此厚きと感へ涙とせり情北くくくさく大エも進成
あけ捨く候ふくく子嘔吐煽煽あはと我々のよハ慈慈と諭す

の善知識も異あらず吾今より生涯ゆりくこの事とハ
定るまどとさうくして主人を改め造る子思ひずその中うち
賢く訂と抜き放ちやりてあまの改り造るさうさうそれ煽
煽をわこの如く携えて夕暮毎に出入とあううとや
熱水魚と生ず

○温泉嶽の温泉ハ山の上子ありその泉此沸く滾くうて湧出る
熱湯此勢ひあうくをづくべうず人の言ふ罪人との熱湯の
中子投込ときハあまの向子葉爛れ但毛髪の水れ上子浮く
出くときやどの極熱あはともその浅き渚子も小魚の泳泳ある
このありとさう一奇事あらずやそれ路のをり子此彼地の
墳墓の何れこれと掃くはれハさハ硫黄の塊をあり

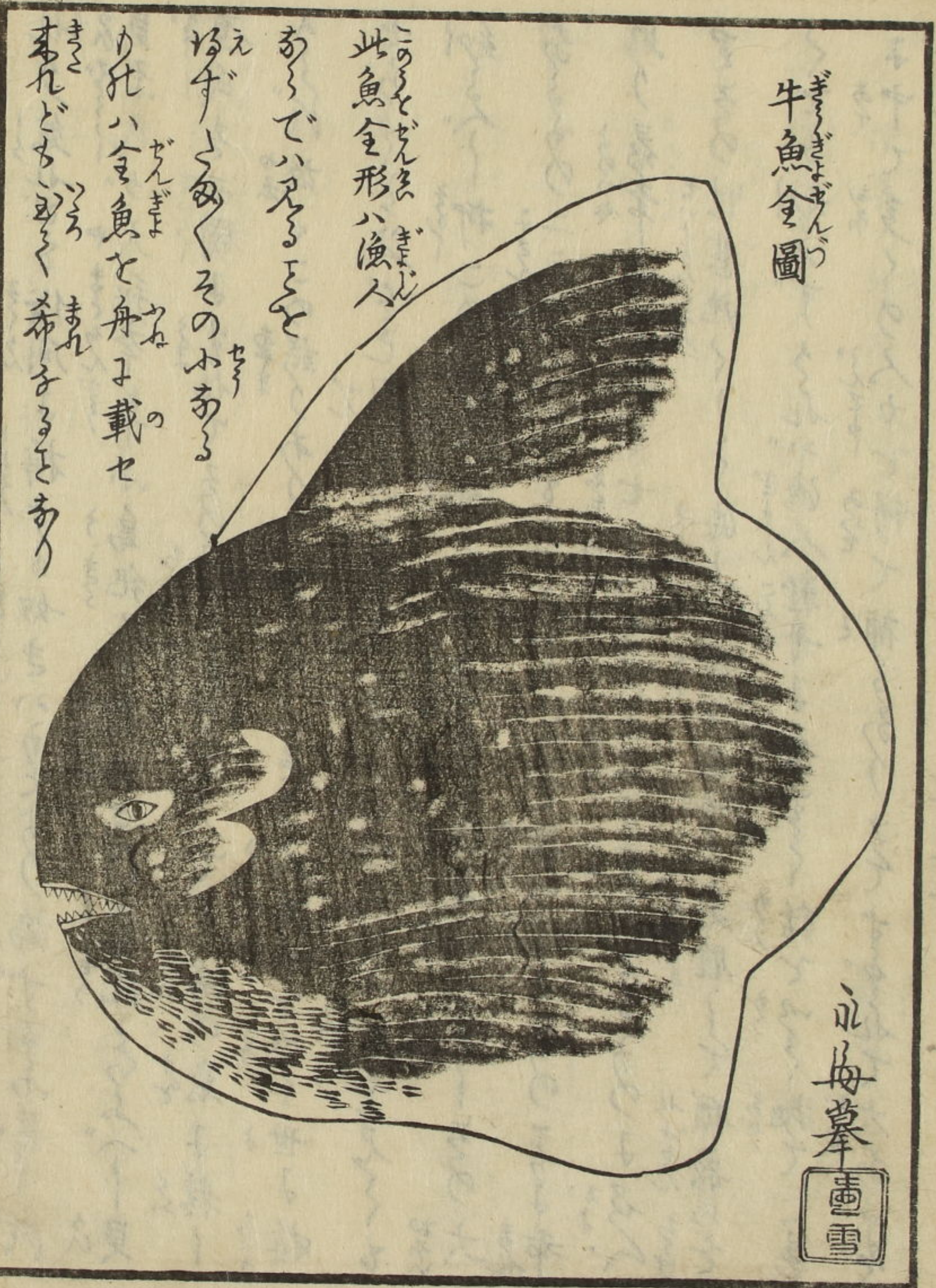
まき伊豆の熱海の温泉ハ日毎ハ時刻ありて海中より沸騰
あて湯ありて沸騰する時ハ夏日雷鳴ありて此ハカガ
鳴りて止む湯氣此起のありてハ晴天俄に曇ると云々
あき熱湯ありてその熱ぐとこころに伝ゆる者ありて杖咄
如くとぞう実子意外此奇とぞう神異經ハ南荒之外有
火山晝夜火然其中有羊とらふとあり熱湯の魚ハ中ハ鼠同
日の談あり

鳥紀

○陸奥國山石城の海中に満方といふ大魚と産す世に鳥紀と
いふものハこれ腸ありて土人の百葉と云々を他邦の人ハ満
方と云々といふあると知るに云々鳥紀と云々稱するハ訛

北リ然れども俗間子稱する如きハハとより論ずるハ
貝系氏ハ大和本草小鳥紀と別物と云々叢説と云々ハ
原氏ハ西國子生れてその地ハ長とありて東海の魚子糖
ろろハ故にこの誤りありと云々その人情物と云々世に稱
せらるるといふと聞見の未だ及ばざるものハ此一事と云々
知るべし抑この魚冬春うけり少くして夏秋ハ多しその大
あるものニニ丈と云々もあべべこれと捕つるものニ希
り尋常のこれと七ハ尺あり三尺に足らざるものハ及ん
里その性甚純く海に浮きかから熱睡して捕らるるを
くとも知らずこれハ漁人輕舟に乘りて釣て以て抛てこ
子中て多くの人力を併て捕らりてすむるハ大あり

牛魚全圖

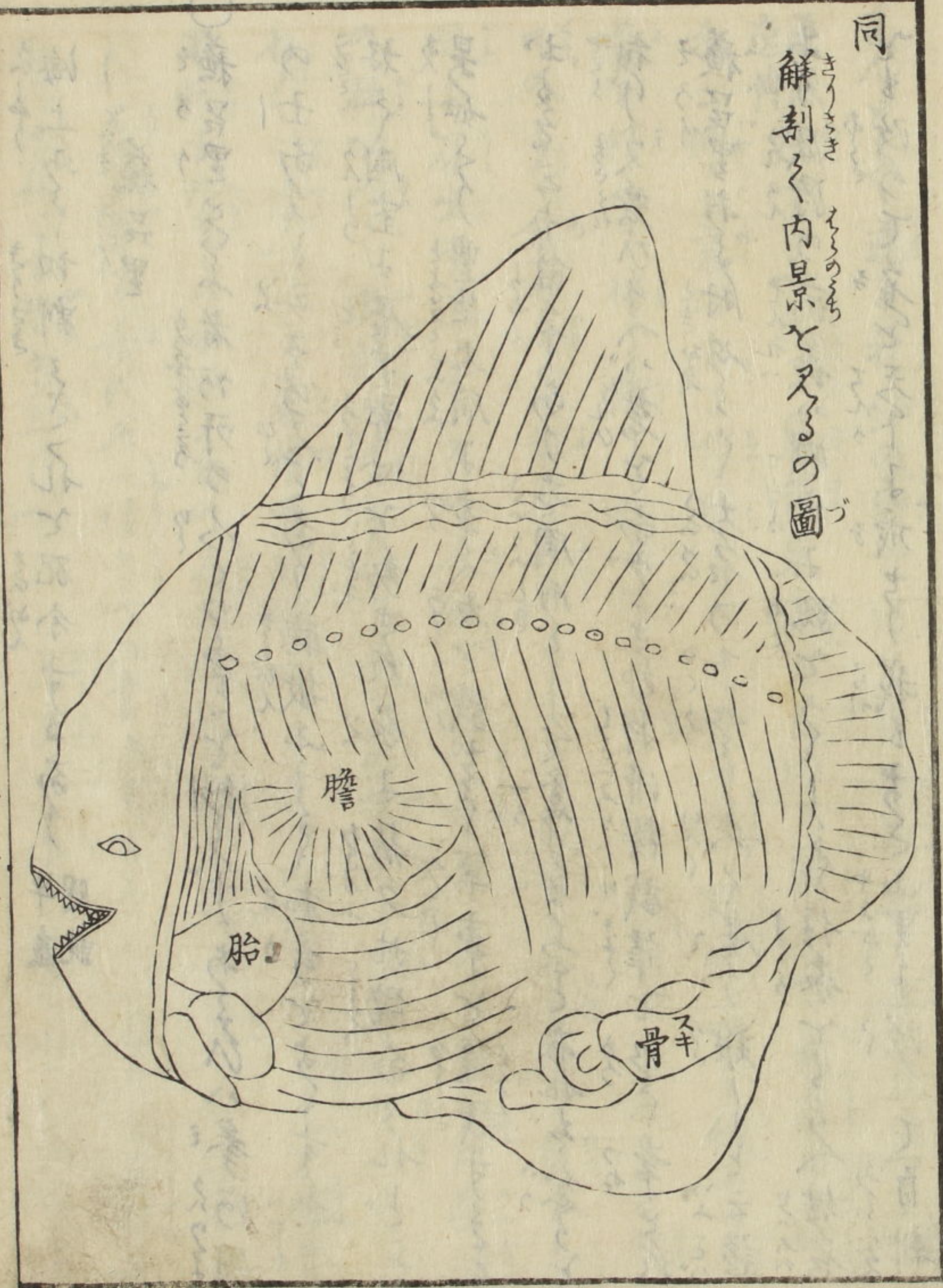


此魚全形ハ魚人
 あらでハ見る事
 はずとぬくその小あ
 りハ全魚と舟子載セ
 事れどもとなく希子とあり

水母草


同

解剖く内景とえの圖



五ノ十三

海上あり切判るこれと死分するあり 牛魚 圖説

蘓呂里

○蘓呂里と云ふ者何所の人ぞとを知らずあまひハ参河國
の士ありと云ふものとあり聰敏不しく和音とよす平常
好く周室子居里嘗心と勤まらぬ家子朝夕此儲ふたれと色
男如くり豊臣太周子事へ力と戮せし軍事と謀議すこと
およそ二十餘年あり左周時とて念り多しとあれが念りと
和げ又悲ひ多ハ慈とあまむ將滑稽戲譚と云ふ常とん
蘓呂里ある時めく大名の下に久く居り難くと云語
あり故府の范壽ハ湖水子路とくく住家とく久姓名
とも改めて名と天下子成り我もあま山里子降れて自耕

○さんとく遂子神仙の術とゆえ白日昇天と云ふと云う
桑隱按ずる小或云鼠樓栗新左衛門と稱して南莊目口町
逸傳 按ずる小或云鼠樓栗新左衛門と稱して南莊目口町
ふる浄土宗のち子坊他とく住める刀此鞘師とく細工小名
譽とゆき彼が造りとく鞘子刀と云ふと云ふと云ふと鞘
口のよく念ふあま子世子異名してとろりとは云々後子左
岡子召出さむと云うその人細工子巧手あるのこあらん懸河
の辨と云く戯譚と考とんくハ鼠樓栗が話とく世人あま
ねく云傳へと云う鼠樓栗臨終の云きり左周より上使と賜を
里何も神とハあまきと云の尋ありと云ふ附子別子望もこ云
一若異府子存ハ此門中へ此書あまもきと云ハ此片傳り
子ハ伎北とも届や上ぐと上望子達しと云ハと云ひと云

たゞと云ふと云ふと狼の口へ差也燕の扱をもお返牙と云きた
まを狼おむも捨付き荒出と云ふと燕松大捨あく狼の友眼
と捨り扱きうあくきやうく仕留めと云ふと想あるうハあくく
されうまくと急あよてあきを燕松お抱く病へ孔久り翌日
より療後業用と云ふと目と追て快氣ありと云ふと燕松と陸
十一歳の童と子年より小くあく電弱のゆいあくくちやう
のちと云ふきもあくく一と云ふえやさくさく不遇もせず親
此危急と救ひ助けと云ふとやめづと云ふとあり龜松手柄
孝行記
その次冊子と云ふと印扱と云ふと世不初よそのありき
世田谷井田路

○平らうく莫逆の友ある岡東陽岡田杏高あつて傳ひて世田

谷ありと捨りしに及すがあうく二意路友社あつて尋ぬ
るやとハ時をきこる世田谷子いづらぬとて香林寺ハ何くと
同少子とや移るまきぬと云ふと古城路あつてふと云うせられて人
人もきのとみやと云うとあきぬと云ふとこの香林寺と云ふハ吉良
家の愛妻常盤前と云ふ婦人のとありと建之せ一と云ふは法
名子ありと香林寺と名つと云うと勝玉と云ふハ太子と云
ふと云うあり此寺も吉良義高の祈願所と云ふ案するハ義言
ハあやありあま右京大夫政忠あり政忠の法号と勝玉と
照岳道旭と云ふ蓋この人の用基あつて一畑屋つまきあつて向子
豪徳寺あり兼つありハ家この寺も曹洞宗あり殊子大伽
藍ありそのうと吉良右京大夫政忠言朝臣の姫君孫子弘徳院

東お院あり今子構のあと懐れうも跡りくあり一孔子より
て此地子を良家此古蹟ありゆゑあり

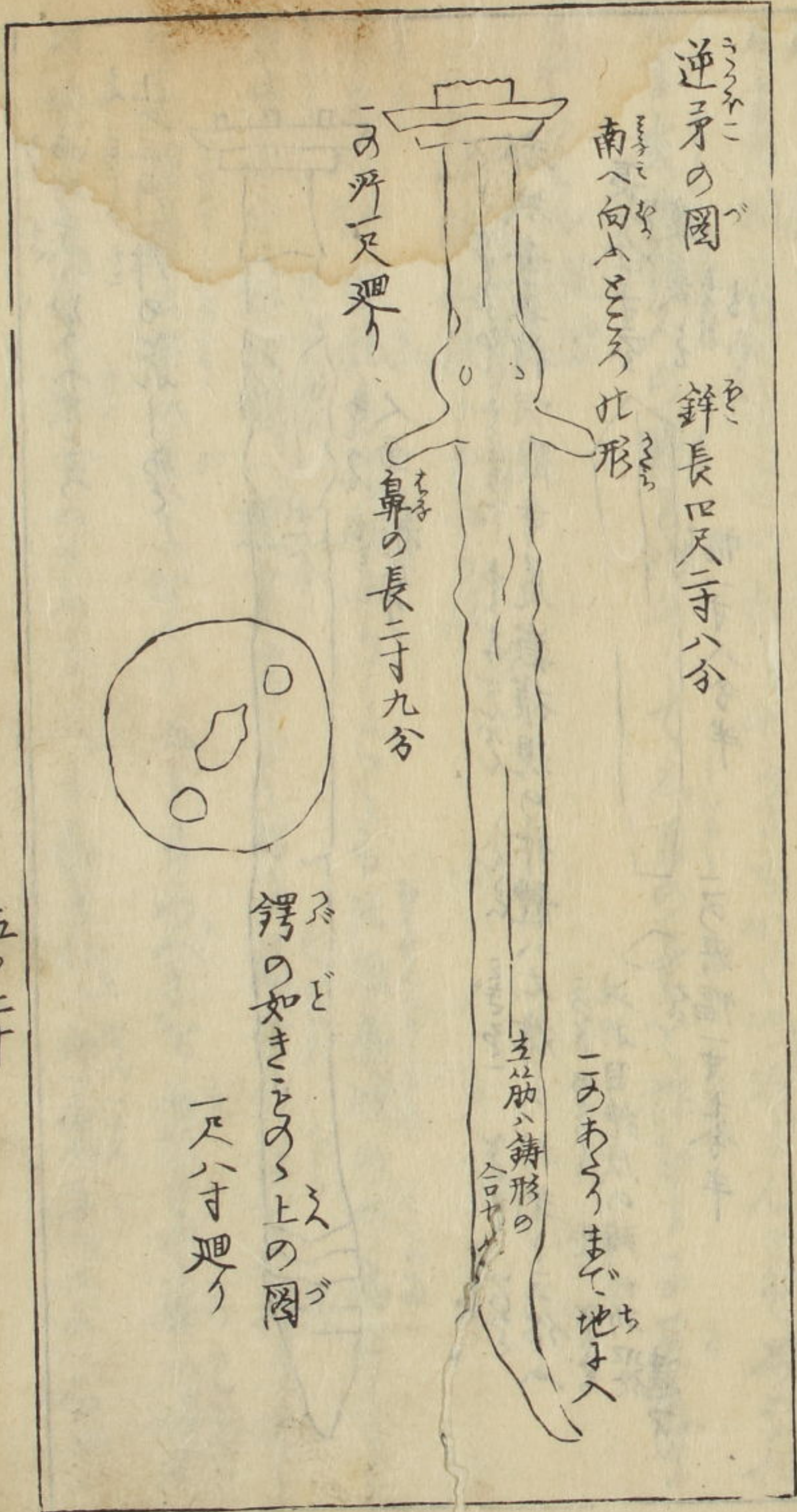
霧島山の逆矛

○日向國ある霧島山子神代の逆矛と云ふことのまてりそあり
此山の事と精しく聞くと霧山も霧島山ともいひて来き
る峯八日向の諸縣郡西あり大隅乃昭於郡ありその中本
あり家殊子言り一と洋の峰と云ふ頂子神代此逆矛と云
くして語つる若一孔とぬむ語り傳へる云伊那那伎伊那那
美命天浮揚子三して霧の海と見下りゆ女子島の如く子
尼あるのありや天浮揚子と云くうきさぐりてそこ子天降り
もひて一孔を逆一女子ト一りたりなり霧島山といふもこり

由ありと云一孔ハ途々美命の比古事と彼二柱の神の御
事子混つてあやまり傳へるありて西なる峯ハヤ
卑一頂より下り此登る及の傍なる谷子ハ事子火燃あが
るゆあり火氣布峯といふ日向此方言子事と氣布といふあ
るゆあり又この火時小ありていづく熾子燃より黒煙り
天子知りひて石砂をく飛散るとあり日向大隅薩摩の主人
ごと神火といひて畏れぬむとそ霧島明神の社を薦子
あり大きある社ありおもしろ此山の内夏北にきりしぬさり
きの花盛りも目もあやありとそ屋外あや一き樹も枝を
あり山半より上子ハ樹を一つもさくなく二飯りある焼石
のこありとそ又山の内子変り大きある池多くありて大

ある地すめりともやさてこの山つねに登り訪る人多きを
 霧の起るに大風吹出づ地よりきおどろくき
 音して嵐此夜に如く暗がりて路も見えぬさうり子也る
 とありてこもすれは此霧のおろれ風ふ吹抜れく止あり
 者も何れあらず子神代の古実とらひくいとめる葉達あま
 のうも教つて多と子楢楨と指を行てさくこの霧おろり
 ぬまがそれとてけり掛ひつて行ば志むくかあとお天をれ
 幸ありとてさて幸はさるるのひもハ長さ八九尺ハあり
 ありて減りやるふやとさきまかへて降の方子後ありと十
 の字に形のかへ又同じさぬある事今一つさるるを世小島
 津美久朝臣の新子造とて連添られさるありとも又ハ鹿見

紙傳
 島の高人池田宗とらひ者この山の神と傳へ仲きをなりたる
 が美海とて造り建てるありともいふを何まう実あるん事

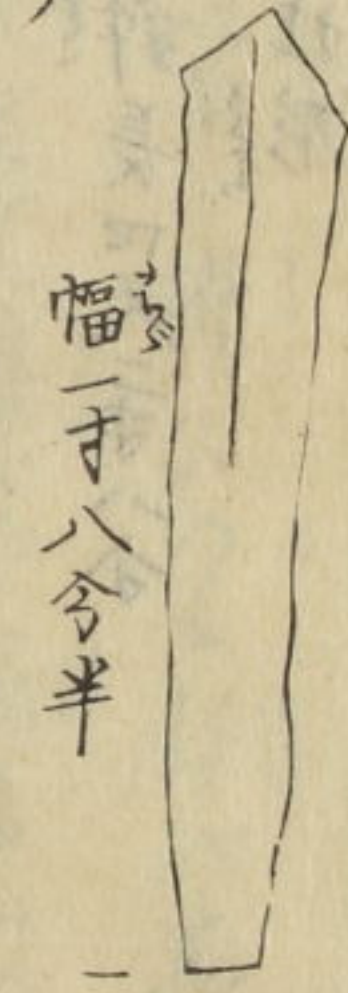


西の方へおろす
上の三所ハ拜のたれあり



都城安永村明観寺荒嶽権現の神體ハ本洋の折先と云傳ふ

長一丈七寸五分
表裏とも
活あり



幅一丈八分半
二ノ所幅一丈七分半

此は目絶皮の拜の折先
速く

阿蘇山

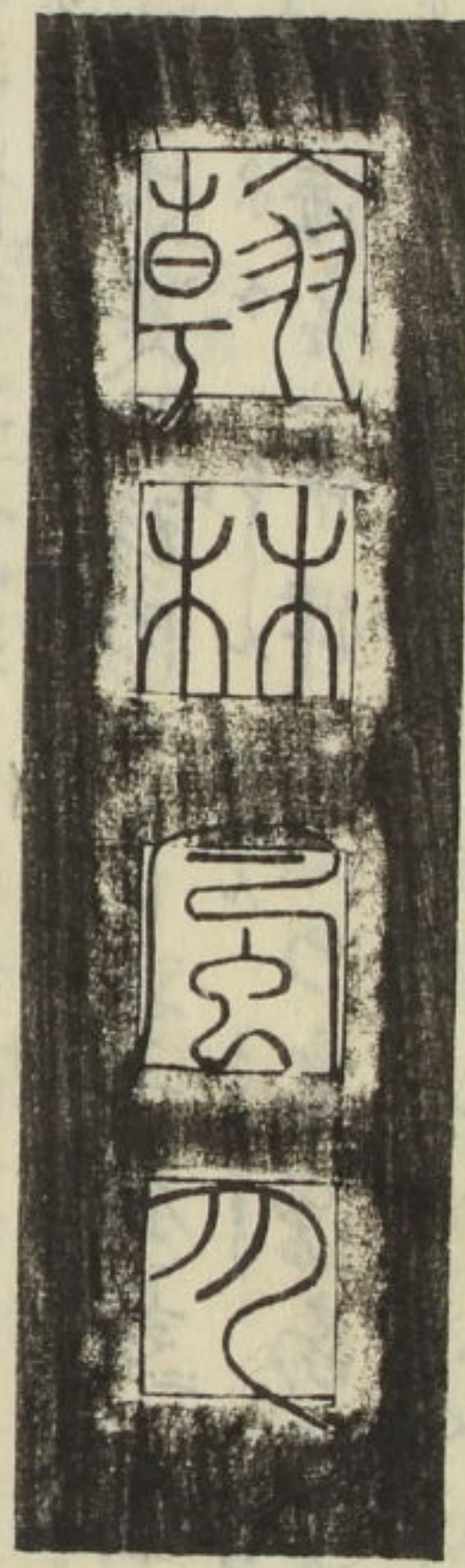
○肥後國阿蘇山を世小安と云ふ聖山ありその山より三膳の煙の状に變化するるときは霞の如く蓋の如く雪の如く蘭草草乃

如く兩傘の如くあざあざあり夕日此懸すときは煙色紫の
霞一兩霄をくさき白一夫黄昏及べば名藏鉢は修り夕
陽山に沈むるまき赤壁萬丈あり子修り又咸陽宮の火云
月おて減ざり〜とき紅くや〜もかくやあ〜ん〜あ
る実小孩人の觀に此あ〜てん月の量と情あり子思ま

筑紫
雑志
杜鵑山凌よをつる

○承久三年の乱を此附あり〜も此條義時の所為〜
次徳帝を佐治國へ遷幸あり〜萬葉の位を〜
て〜瓊樓玉宇の美におろ〜ぬ〜あ〜きやあひまや華門竹若
の陋より久きを詣で〜る人もあ〜れハ神意夏さのやど

らぐとろく 雑林唱 彼邦の墨も佳おあれども筆ハ狸毛
 て最よろし 然もども多く獲らう



畫工梅雨

○ 浄厨屋梅雨も俗名と伯耆と稱す相摸國之所の領主元菴

の侍士あり 狩野元信と學びて繪と善す 同國民政の画
 工に五樂と云ふ所のありす 是れ此名人あり 然もどもこと
 常は梅雨が許し 狩事と尋ね問ひしうと云ふ 丹青著
 本集

福佛坊

○ 陸奥國會社の山中に福佛坊と云ふ 吳人あり 村落小徒來
 もせ 人子交りもせむ ありしう 正保の初め 撫人の山に
 かくとぬく 二本と云ふ所のありし 子歎色容親およそ七八
 十歳なる 小足えりしう たりや 是れ人あり 伊豫の屋敷
 二十五年の附に死地あり 是るとき 尾張國熱田と過り
 らる 子種と云ふと云ふ 是の種ハ 今已に 數百年の
 あり されば 此人の 年數 及び やる 人 讀書
 會意

蔡花

○蓮華と蔡華とも云ふあるれども蔡字子蓮華の義字書子年
ころあり傳家の説子善導の觀無量壽經義子此華
お侍て蔡花と云ふ蓮華と指て云あり相傳古人あり
天竺國小引一熱地の蓮と云ふぬりてこれと蔡の池
小裁りあり蓮とやぐて蔡と云ふり於て蔡地子龜と出
す子よつと龜と蔡と云ふ如く龍氏按ずる小論諸葉
解の何晏注云蔡も國君の吉龜蔡地子出づ因以名とす
と云えり

人體塊

○大隅國肝屬郡垂水郷中俣村と云ふところ一人の婦人あ

五歳五十三少二月に病氣づき己子死ぬるあり
しか醫と相き診察せしむる血虚體勞ま腹中塊
ありてさうこ痛むのあるとりその附婦人云吾年
十六歳少く嫁するに未月信子存らん二十七歳の附娘
紅廟と云ふすかそち孕り三月と経てんつす食禁て
まらずしつひは流産せりそれよりさう子経候子あぐ
しありて一が翌年経候子ありて又孕む六月子あは
る附嶮岨の山路と歩ゆてあ子入りその夜腹痛之苦
や愈ると云ふ以血と下すこ子於て醫於差をあて服さ
しお數月と経る強あり翌年小及び腹中少く緩やう
あると云えり是より以來経候遠くめづらず又孕む

工ともあつりしが附と膠作さしこころ痛むのこみち華と用ふ
子いささう駿あつりきつろくこれと按ずる子児骨の子宮小刺て
患とあはし似さう因り利刺と興ふとと又聊駭あし知る
小使の通じよろくろくすあつり付とて急子痛こあり
再びる此脉と見る子弱くし力あはれをこまふ補元乃
兼と興ふると久しく同年の九月子一塊おのりうろく人
知らず陰子簪下子瘻あは醫る此幸と少くやうて垢出さ
りその塊と換る子児胎全く後さうその質ハ軟骨の如くあり
あつろく懐小往昔峻岨子拳るの肘腹中の震轉つよし臍帯
絶て見胎元との氣あさふ竭きて塊とありて腹中子結ル
たると二十餘年子及つると見えたり今子ありて下ると云

このハ実子人身此恠病の量る久ろざると不忠義と云
べしこれハ延寶六年戊午此歳九月の事ありき 南畝 掌記

廣智法印

○世人の云越後國の人廣智法印をその全才おすして今
尚存すと云ふ僧の盤泉が松湯紀形子孫が三馬場の山中
子右小路ありし三里とがうて飛瀑の巖子かりて落る
こころが乃これ廣智法印の堂あり寺子至る所扉と清
時小老僧のお語り子廣智ハ奥妙此人あり曾高野山子登
らんとあつり此地子到りこれ飛瀑子紫雲の生するを云て
これぞ實此塔卒の浄土あつると云入定ありし子り不忠
義也今子四百七十年全體壞ざると云の如くと云ふ此

年依く予又ふ少く延暦の辰日光山此麓小虞智菩薩
といつる所のあり法衣にも子兼優北慈覺と携て比叡山
子登里く信教大師の弟子とすといふるハ蓋この人あふ
べしきうハ今と距と九百年子及むんと一壽幸といふ屋
一續秉燭
茗譚
米占 管粥

○田家子も毎年正月十五日小米占管試といふ占求といふ
今歳又ハある年の農稼を決るといふその占此違さる
も亦奇といふべし故子田家あふハ正月十五日と望年と称
つる歳旦あふも大物小祓ひ賀て親子兄弟一子子舎集ひて
嫁せし婦あふ親省くく子あふさて戸戸と杜ぎ化の

客と謝くお忌く田神と祭里稲粟菽麦を始といふ一
切の種子を大釜をいれ粥を煮て前とこわく竹筒穀を
と造りその筒毎小衆穀の目あふとあるハ刻とあるハ
を書ある粥の中子投入これと爨考るとよく沸らして
それ竹筒をえあげん子筒の内子おのく衆穀の入り
かざるこ一盈子填実とあらさるとあるハ粟此橋満
るを粟の指此有年あり粟の粟の海を粟の粟の有年
と知りあの中あふ中年を去る年と知り衆穀をか充
突ハ五穀の豊稔と知りて海戸くおのく占と取訪て海食
を造りて杖のお成と後ひ禱るなり又風神の祭子拍流
といふとありそれ拍豊年ハ浮みあふ此凶年ハ沈みたるこ

まは四月七月あるとこるるるる古よりあもあふあり
の拍子同との沈む子浮くハ涙ありとらるとしてこれあり戒
菴漫筆小東入共門十萬家家と爆穀ト年華とありこの年
華トハハ上元正月十日の夜子あんとて唐土あも年の豊凶と
とて多し今の清世あもハ正月七日より十日までと人穀
豆納と祝書しとこれ日天氣和清あハその歳豊熟あ
よりとり吾邦の古も大歳の夜とて草摘こくとさき登子
のやとて菘菜さうさぬ子著子しと明の年乃運とを
とや古よりあるとて年のおつろさき子とてすす指あ
小年と裁すうかこよあり十二月晦日岡子登り我両足の間
より居他の氣と觀て明年の吉凶と知るこれと岡見とて

ま吉凶の氣ととてとととあり又正月元日西風あ
の雪あめくは明日とて業とあたる雪あ終日うちあびま
用あるとあらずその年とてれよとてき瑞ありとて按す
る小扑拵の新葉と芽子遅速ありとて芽の遅く出る方より
大風吹出るとしてとあどもあも自然の運氣深理小年
とて人の古考あもハ遠よとあるとんうとて天地用廟そ
此と風兩陰陰同とてき年ハ絶とてさきの理ありとて千一年ハ
ハ舊の曆子とてとて色年の于支とて回りとて同とて
多れと前と氣子ハ歳差あハ合應するとあもとてんおよそ
天氣を諸國東西南北一同あるとしてその由とて小ありて山家
の天氣ハ老農子尋ぬ海濱の天氣を漁夫知とて子岡とて

貳編 全五冊

北条高時 五代国師 其系純秋 日朗著
薩 足利号氏 三任の子局著の像系傳
記とく

三編 全五冊

山本勘次晴幸 ○細川光元朝臣 ○日置輝
正入道の像系傳記とく

四編 全五冊

真田輝正幸隆 ○北條早雲入道の像系傳
記とく

武林名譽録 全五冊

志津嶽嶺江の軍 ○竹中半兵衛一色酒
信小田原通の経 ○里合又十年まの
とくら山 中康之助の旅行の伝を
りら武士の名譽と撰記して洋とく

柳菴雜筆 全四冊

此書ハ柳菴栗原氏初弱の頃ありの系記凡百
有冊伊呂波四十八字すまろく在古ふまれし抄
添して四冊とありたる武士無限の古今のね遠町
人百位の考とあはれ考(記)とく好古博考の
一端とく(とく書あり)

菱湖先生法書目録

前赤壁賦 八分

後赤壁賦 行書

岳陽樓記 真書

歸去來辭 行書

醉翁亭記 草書

五柳先生傳 草書

阿房宮賦 行書

上 芳春帖 坂倉素鷺書

上 孟春帖 隨雙軒素俊書

上 陽春帖 素鏡先生書

尊圓 琵琶引 正面摺一帖 折本

御 千歳日用文章 橘正敬 先生筆

新編歌俳百人撰

柳下亭種員撰
一陽齋豊國画

近者うら歌と嗜と俳詩と好う人々其名高き中より尋常ありぬを集めて歌俳百人撰とて安永の石雪居海壽のこの物せし小冊写本とせしは是と視て名歌俳の多きを其人の傳におろそと免れ雪の朝と暮と捲けり人のこのと郭のわらと寫る心託をそのれい委く其傳と流るるり画像とほごありけり自然なる人のありて其の形像を其書に寫しひとと嗜と捷徑ありぬはは探速ありぬと書辨知新書ありぬと実ありぬはは系流の英名を其のしこむ村雲もから碧空の明月と觀るやそを萬ありぬはは又捲るる美名あり大方久きは姓も洋ありぬはは大山様と虎のふる谷間より其の歎息の情の等閑ありぬとこれと委曲記とて曾原本より憚りぬはは混りぬはは行の便あり省じて更よほるること補入れて數不充しむ柳歌俳の佳物也其徳不徒はは俊傑の吟詠と拙らぬはは一人と察し其此道にあつ海壽のえらびも則是ありて花朝月夕諸臣不歌とてよまて賢愚を試させむひ一人のくはありぬはは漫不半頁填ありぬ

重修真書太閤記 初編卅冊

日盛法師願文より曰吉乃誕生曰吉乃松下小仕へ元服し木下教吉即と名乗大馬車を碎き桶皮胴のて又織田家小仕へ外くの軍金持の筆上魁の鎗より桶狭の前まで

同

二編卅冊

永祿二年八月十八日義元死より秀吉又色の吹貫墨股若葉後稻葉山落城飄草の馬印伊勢合戦室町合戦より覺慶新公方とあり朝倉より美濃より後子信長出馬明智光秀仕成る

同

三編卅冊

永祿十一年八月新公方上洛の羽城を攻落し三好三人京都退去信長京入龍見後五郎とて本庄寺合戦將軍御所造家伊勢合戦越前出馬京長退口井上大炊木村又孫とて小谷町を濫妨まで

同

四編冊

元龜元年六月好川合戦秀吉横山を
五野田福島一揆三好義朝倉津井
坂本親軍堅田合戦一揆掃討の旨
浅井侍を降し朝倉義宗出陣并最期
渡井長政滅亡越前一揆掃討す

同

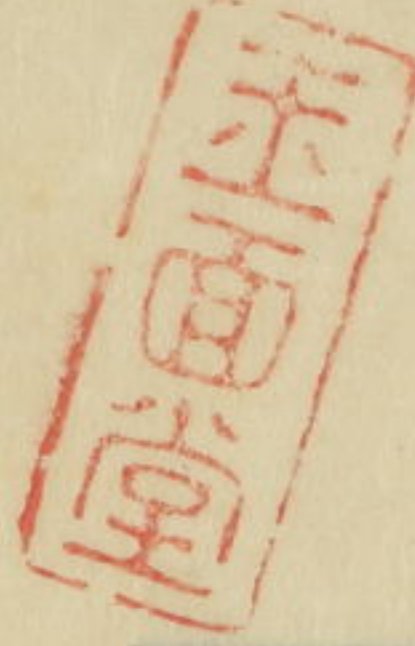
五編冊

天正三年今川氏真千鳥番部を信長ふ
越前長條合戦越前一揆征伐安土
普請二条城造安羽宗秀吉勳當松永
久秀築城滅亡上内合戦別所深板葛
本丹波城攻天正十年勝頼を攻る

同

六編冊

天正十年信長自身光秀を打擲妙心寺
蘇鉄安土宗論秀吉備中怨合戦高松
水攻信長二十八條の悪事本能寺合戦
信長生害二条軍信忠生害伊賀越前光秀
安土攻毛利と秀吉和睦上洛す



嘉永五年壬子新刻

大坂

心齋橋通北久太郎町

同 博勞町

同 筋本町角

河内屋喜兵衛
河内屋茂兵衛
河内屋藤兵衛

日本橋通二丁目

同 二丁目

須原屋茂兵衛

山城屋佐兵衛

小林新兵衛

岡田屋嘉七

英 大助

丁子屋平兵衛

和泉屋金右衛門

須原屋伊八

紙屋徳八

江戸

本石町十軒店

大傳馬町二丁目

横山町三丁目

浅草茅町二丁目

筋違御門外猿籠町丁目

